

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.113

京町家通信 第113号 2017年7月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ <http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ● 観光と町

6月上旬からドイツのケルン、イタリアのヴェネツィア、フィレンツェを訪れる機会を得た。いずれも歴史都市として世界的に有名な観光都市であり、都心部は古い町並みそのままに景観を保っている。

ケルン大聖堂で夜、ミサ曲が演奏されると聞き、行ってみた。聖堂の奥深く、内陣といえいいのだろうか、祭壇にオーケストラのメンバーが並んでおり、すぐそばに椅子が並べられていた。少し早い目に行ったが既に行列ができており、瞬く間に内陣はいっぱいになった。聖堂での「コンサート」は折りに触れ開催されるそうで、私たち観光客にも開放されている。ありがたいことだが、「地元の教会に所属される方々はどんなふうにお考えなのだろう」とふと思った。

ケルンから移動して、一転、夏空のヴェネツィアに到着。ピエンナーレが始まったこともあり、あちこち混み合っている。隣の島へバポレット（水上バス）に乗って行くことにしたが、いっばいで2回も船を見送った。ぎゅうぎゅうに並んでいるとその隣にも別の船に乗る行列ができ、現地の人と同じように並んでいらっしやる。仕方がないことと納得されているのかどうか、尋ねてみたい気持ちになった。

フィレンツェはファッションウィークという催しで、大変な混雑だった。朝、大聖堂は入堂するのに30分待ち、ウフィッツイ美術館近くの広場も団体でいっぱい、入館は予約しないと30分から1時間待ち。レストランもよく知られているところはいっばいで、次の候補を選ばざるをえなかった。まちなかにはぎやかで、おしゃれな人たちが夜遅くまで往来を行き来し、ホテルの部屋にいてもその喧噪は聞こえてきていた。

フィレンツェのホテルの多くが古い建物をリノベーションしているが、千差万別。一流ホテルもたくさんあるが、まちなかには上層階（たとえば4階から6階）はホテル、下の階は事務所や店舗といったものが多く見られる。25年前にも泊まったことがあるホテルに泊まったが、ヨーロッパのホテルグループに入ったあと、内部が大きくリノベーションされていて、おしゃれではあるが、昔の面影はほとんどなかった。

フィレンツェのまちなかには名だたるブランドが並び、か

つてのまちなかの面影は薄れていた。私はフィレンツェの様変わりに驚き、25年前に話題となったジェントリフィケーションのことを思い出した。まちなかが整備されていくに従って、それまでの住民は外にでていき、新たな層が入ってくるという。その話を聞いたときには、それがいいことなのか、良くないことなのか理解が出来なかった。ヴェネツィアも観光客が集まるところはブランド街に変わってしまった。まちなみはそれなりに美しく守られているが、かつての街の雰囲気は薄れているのは惜しいような気がした。

京都に戻り、あらためてまちなかを眺めてみた。祇園にはエルメスができ、四条通にはブランドショップが並びだしている。近年まちなかは急激に変わりつつあり、町家にもいろんな店舗が入ってきている。それにつれて家賃も高くなり、土地の値段は急激に上がっていると聞く。他都市や海外から土地を購入する人もあり、京都も世界の観光都市の仲間入りをしていることは間違いがないだろう。あちこちで展開されているホテル建設、またたくまにリノベーションされる町家のゲストハウス、混み合うバス、混雑する通りに日々うんざりとしているのだが、このような状況はいつまで続くのだろうか。ジェントリフィケーションの波がじわじわとよせてきているように感じる。

人の暮らしがあつてこそ、まちは個性を発揮すると思っ
ている。商業的な活用だけでまちが生き続けていくとは思えないし、それでは本来のまちの機能が失われてしまうだろう。誰のためのまちなのか。いろんな人が行き交うまちであつてはほしいけれど、そのまちを維持していく住民が様々な我慢を強いられる、その我慢が報われることはあるのだろうか。

不便が面白いと感じた過去のイタリア、観光客が快適に過ごせる今のイタリア、その変化の過程を京都がたどっていくのだろうか。観光で生きていくという自覚は私たちの中にも生まれてくるのだろうか。

＜小島 富佐江（京町家再生研究会理事長）＞

論考 ● 進化する景観政策—社寺周辺の眺望と参道の町並みを守る新制度

前号で紹介した「京町家の保全及び継承に関する条例」と並んで、京都市の景観政策をさらに進化させる「歴史的景観の保全に関する具体的な施策（素案）」が市民新聞区民版等を通じて意見募集されている（パブコメは7月10日から8月17日まで）。町家は解体する前に届け出を義務付けるが、もう一つ重要な社寺周辺の町並み山並みの景観も事前協議を義務付けるという制度改革である。

ユネスコの世界文化遺産「古都京都の文化財」として登録された17の社寺と二条城内の14が京都市内に集中している（宇治上神社と平等院が宇治市、延暦寺は大津市）。それぞれが地域固有の歴史と文化が一体となった優れた周辺景観を誇っている。世界遺産条約とその履行指針には、登録された文化遺産の周辺は法的管理下に置かれた緩衝地帯（バッファゾーン）として、遺産本体同様に保護されることが定められている。とはいえ近年は社寺とその周辺の緩衝地帯で懸念される事例が見受けられる。事前に京都市に相談があり、景観政策に沿って慎重に計画される建物もあるが、規制の範囲でも貴重な歴史的景観に影響を与えかねない建物も見受けられる。

読者の皆さんの中には、京都にお住まいでない方もおられよう。念のため申し添えると、御所東の梨木神社境内のマンションと、下鴨神社参道脇駐車場等を転用した定借付マンションがすでに竣工し、御室仁和寺前のガソリンスタンドとコンビニは計画が止められた。近年社寺を取巻く経済環境は急速に悪化している。氏子や檀家は減少の一途、その維持に悩む宗教法人が多い。

京都市では2007年からの景観政策の検証を経て、2014年度からの3年間「歴史的景観の保全に関する検証会」を設置し、社寺の関係者、経済界、学識経験者による議論を重ねてきた。そのまとめとして、今回は、世界文化遺産に登録された社寺等の周辺500m以内で新たに建築行為を行う場合には事前協議を義務付けるという。新景観政策の眺望景観条例の制度を拡大する。すでに全国で最も厳しい規制ではあるが、建築行為に対しさらに一段と慎重さを求めている。

眺望景観では、現在の視点場38か所に11か所追加される。世界文化遺産を含む14社寺と二条城に御所と桂・修学院の2離宮を加え17が境内等として指定済のところ、大徳寺、北野天満宮、相国寺、妙心寺、東本願寺、南禅寺、平安神宮、知恩院、建仁寺、東福寺の10社寺が加えられる。

制度改革のポイントは3つ。第一に社寺周辺の眺めを守る範囲を拡大、その中の建物・工作物は地域ごとにきめ細かなデザイン基準を定め、それに沿った協議（景観デザインレビュー）を制度化する。第二に、周辺に定めた範囲内に景観上重要な歴史的建造物や樹木を指定し、その保全に際して専門家を派遣し相談に応じるとともに、具体的な助成を行う。第三に、社寺周辺地域の景観の特徴を分り易く伝え、求められる設計上の配慮を示すとともに、住民や事業者と協働で歴史的資産を活かしたまちづくりを進めると

している。

眺望景観条例では、北山・圓通寺庭園の借景、比叡山の眺めがよく守られている。広大な岩倉の市街地で毎年何十もの新築・増築工事ごとに丁寧な検証が行われている。電柱や携帯電話のアンテナ等工作物の申請も義務付けられている。圓通寺は山並みへの眺めとして定められた3か所の視点場の一つである。この他にもしるしの眺めとして大文字等7か所、境内の眺め17か所、水辺の眺め2か所、庭園からの眺め2か所等がある。

今回は、借景などの眺めに限らず社寺境内から見える場所として全方向に500mまでの範囲内と、社寺を見通す200mまでの長さの参道沿いでの建築行為が協議の対象となる。デザインレビューといって景観アドバイザーと市の担当者が事業者、社寺とその周辺の自然、町並み、その街固有の無形の価値の守り方を伝授する。文化力を欠き、技術が低く、歴史的景観を壊しがちな建築・不動産事業者を正しく導くことで、ユネスコ世界遺産の価値を守る仕組みである。同時に、駐車場設備と車庫、垣・柵・塀・擁壁等の特定工作物、電柱、標識、街灯、舗装、側溝等の道路内工作物についてもデザインレビューの対象となる。府市等公共が設置する物も、市民の批判に晒され、より相応しい意匠に整えられる。

10年前に新景観政策が始まる前に、「あなたの家は建替えができなくなる..」と市民をミスリードする新聞の意見広告が掲げられた。ズブの素人の誤解に発するもので、直後の京都新聞のアンケート調査で8割の市民が政策を支持したのだから、そんな愚考に惑わされた人は少なかった。今回はそんな誤解もないだろう。景観施策の進化・充実で一段と地価が上がることは、この10年間の経験で誰でも容易に理解する。何も京都に限った事ではない。西欧諸国の歴史都市でも世界文化遺産周辺の不動産価値が高いことはよく知られている。取引件数も多い。実際にその効果を楽しんでいる人は京都でも多くなった。下鴨神社参道沿いの糺の杜の3階建マンション99戸は億ションばかり。その高騰ぶりは尋常ではない。だから、京都の景観の大きな経済効果を損なってまで不細工な家を建てる自由を求めるとは許されない。

今や世間は衣食が満ち足りて礼節ばかりか歴史や文化を知るようになった。礼節より気楽な歴史や文化を欲しがっているともいえよう。歴史的景観を守り、町家の町並みを守る京都には多くの全国、世界から老若男女集まってくる。古都京都の文化遺産は永遠に残す。その残し方も日々進化している。地域景観協議会制度が広がり、専門家を加えたデザインレビューも始まった。京都に求められる歴史的景観に沿うデザインのあり方を求めて、その協議方法も日々進化していかなければならない。京町家再生は四半世紀を経て、歴史都市京都の再生を導く段階に差し掛かっている。

<宗田 好史（京町家再生研究会 副理事長）>

再生の試み ● 長屋を住まいとして再生する—大家さんの思い

下京の長屋を住まいとして再生するプロジェクトは、第1期で5軒を再生し、それぞれに新しい住み手を迎えました。現在、第2期に入り、6号を再生したところです。再生に踏み出されたご主人が亡くなり、奥さまが新たに大家さんになりました。変動の2年あまり、ずっとそばで見守っておられた奥さまがどんなふう感じておられたのか、お伺いしました。(これまでのいきさつについては京町家通信105号、107号、111号をご参照ください。)

● ご主人の思い

借家で収入を得る、すなわち商売として考えていない、お金はそれほどかけたくない、という気持ちから、活用されず空き家のままになってしまっていたようです。お金も建物もご主人の裁量なので、奥さまとしては何も言えない状態でしたが、「きちんと直して固定資産税が払えて維持さえできれば、そんなに大儲けしなくてもよい」とずっと思っておられたとか。奥さまも外でお仕事をされていますし、子どもたちにも家賃収入で食べるのではなく、自立して働くことをすすめてきました。

それでもご主人が直してみようと思えるようになったのは、町家に暮らしている人、町家関連の活動をしている人が身近にいたから。さらに京都大学高田研究室、前田昌弘さんがまちづくりのことで関わってくださったことが大きなきっかけになったようです。人とのつながりや客観的な評価が所有者には励みになるのかもしれない。

● 5軒の再生と相続

銀行の融資をうけての改修だったので、「とにかく返済なくっちゃ」という気持ち、しかも再生に踏み出したところで、ご主人の体調が悪くなってしまい、看病も重くなりました。不安が募るばかり。でも、5軒すべてに住み手が入ってくれると少し気持ちに余裕もできました。

ご主人は次の世代に渡すために6号を処分して相続税を支払う計画だったようです。奥さまとしては5軒が再生された段階で隣の6号がそのままというのは「あり得ない!」。融資の残りもあり、思い切ってお主人には内緒のまま、子どもたちと相談して、6号も再生することにします。税理士さんと相談していたら、相続税が圧縮できる方法がいろいろあることがわかりました。結果的に相続が発生しましたが、融資の返済もあり、思っていたよりずっと相続税が軽くなりそう、これなら払える!という気持ちになったそうです。しかも手続きには銀行がやってくれるところもあります。もちろん完了するまでにはいろいろあったようですが、お話を伺ったときはちょうどそれらがおさまったところでした。

● ターニングポイント:「わからない」不安を解消

経験してみないとわからないことが多いけれども、いろいろな人のつながりで不安がなくなる。そうすると、「なんとかなるんやなあ」という気持ちになる。しかも負担金も軽減される。そしてこの不安を解消していったのは、人のつながり

でした。再生を通じて、奥さまがつながっていく力、マネジメント能力を発揮されておられることがよくわかります。

● 住まいとして再生して

もちろん大家さんとしての苦労はあります。たとえば最初の住み手の一人はイタチの駆除でもめて、半年で出て行かれました。お洒落な町家にファッション感覚で住もう、という人には、この町家は似合いません。虫もネズミもイタチも入ってきます。ご近所づきあいもあります。

そこで不動産屋さんとも相談して、「町家に住むとこんなに大変なことがあります。それでも住みたかったらどうぞ。」という文章を入居希望者に見せて説明してもらうことにしました。大家さんとしての負担を減らし、ちゃんと住んでくれる人に来てもらうようにしたのです。

「家は作品のように住むものではありません」という奥さまの言葉は町家の生活にとっても大切なことです。住みやすいようにしてくれて良いけれども大事に長く住んでくれるといいな、という思いです。

ゴミの出し方もいろいろ検討して、カラスネットを表にかけしておく、仕事から帰ってから片付ける、というルールを作りました。「朝は時間があるので、路地掃きはしましよう」という住み手もおられそうです。ちょっと考えて工夫すれば、それぞれが大きな負担なく暮らしていく仕組みを作ることができます。お互いさまの生活ができるところが路地の魅力であり、大家さんが近くに住んでいるメリットでもあるようです。

● これからのこと

ご主人は緑が好きで、いろいろな植栽がありました。ちょっとは整理しましたが、「あけびわ路地という名前がもはや世間では通用しているらしい」ので、あけびとびわは枯らしちゃいけない、と手入れしているそうです。「とにかくなんとかしなくっちゃ」という焦りから、「さてどうしようかな」という気持ちへの変化がこれからのことを考える余裕にもつながっているようです。

お話を伺っていて、借家経営というとおおげさになってしまいましたが、「借家で稼ぐ」のではなく、「固定資産税が払えたら十分」という気持ちが大切だと感じました。昨今、空き家の活用が語られますが、投資してもうけるのではなく、地道に生きていく手段として、住まいとしての再生があるのでないでしょうか。住まいとしていい形で維持できれば、京都のまちなかに町家の暮らしが当たり前のように生き続ける、京都というまちに大きく貢献していることになるのです。

もう一つ大切なのは、人のつながり。新しい住み手との関係ももちろんですが、困っている所有者が再生へ至るまでには、多くの人々との出会い、つながり、励まし合いが必要です。そのような橋渡しこそ再生研の役割だと痛感しました。

<丹羽 結花 (京町家再生研究会)>

スペースデザインカレッジ

「町家改修案コンペ展」 開催報告&投票結果発表



スペースデザインカレッジ東京校・京都校、スペースデザイン設計科2年生による町家改修案コンペ展を4月25日～30日に開催いたしました。この取り組みも13年目を迎え、今回の舞台は路地が魅力的で、2アクセス可能な4軒の町家。現在は空き家になっているこの町家を保存・再生すること、地域との関わり方を考慮した提案、各グループ思い思いの「使い方」を表現しました。4月21日には関係者の皆さまにプレゼンテーションを行い、講評していただきました。会期中は、多くの方にお越しいただき、120票を超える数の投票をいただきましたことを心より御礼申し上げます。この場をお借りして結果報告をいたします。

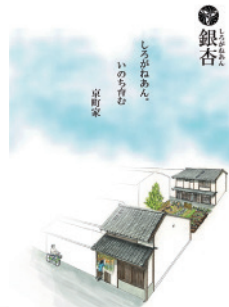


第1位

Bグループ／小室風歌 原田拓宜 福田恭子(京都校)

いのち育む京町家

この学区のシンボルツリーはイチヨウだったそうです。そのイチヨウの木の周りに子供たちが集まり、すくすくと育っていったことと想像します。その光景をもう一度再現したい、そしてこの場所で新しいことを学び、育むことでその経験を将来に少しでも活かしてほしいと思い『食育、農育、保育』の三つのゾーンに分けて提案します。



第2位

Hグループ／木下修也 宗誠 田中里砂 堀江剛彰(東京校)

東京から京都へ新しい町家のあり方を提案

今回京町家のリノベーションを提案するにあたり、近隣の木工関連の職人や、地域の人々が活躍できる場、そして地域の人に利用してもらえるコミュニティ機能を持った京町家の再生を目指しました。食文化体験をテーマに、弁当箱屋、おばんざい屋、体験工房の3つの空間で分け、地域や地域外の関わり合いが再生・復元できるように願いを込めて作成しました。



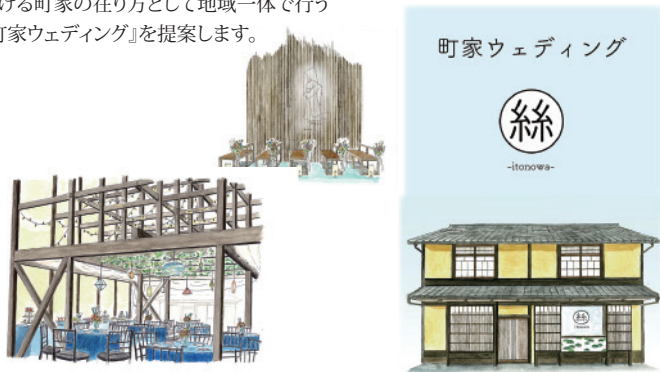
べんとはうす



Aグループ／太田瑛梨 蒲池恵実 野口隆之(京都校)

地域一体となって作り上げる、 他にはないウェディングシーンを・・・

町家の位置する地域周辺は工芸の町であり、歴史ある呉服屋・和装小物・料亭など結婚式を行うにあたり、最適な特徴を持った商屋さんが点在しています。町家の本来持つ地域コミュニティを最大限に活かしこれから先、未来に発進していける町家の在り方として地域一体で行う『町家ウェディング』を提案します。



Cグループ／玉野井菜緒 山元千保 鈴木知詩(京都校)

職住一体の集合住宅

該当地域について調べた時に、歴史と文化を重んじ、伝統と暮らしが息づくまちづくりを目指していることから、京都は手仕事の町であるということに着目し、若手職人を対象とした、職住一体の集合住宅『京町家手仕事テラス』を提案します。

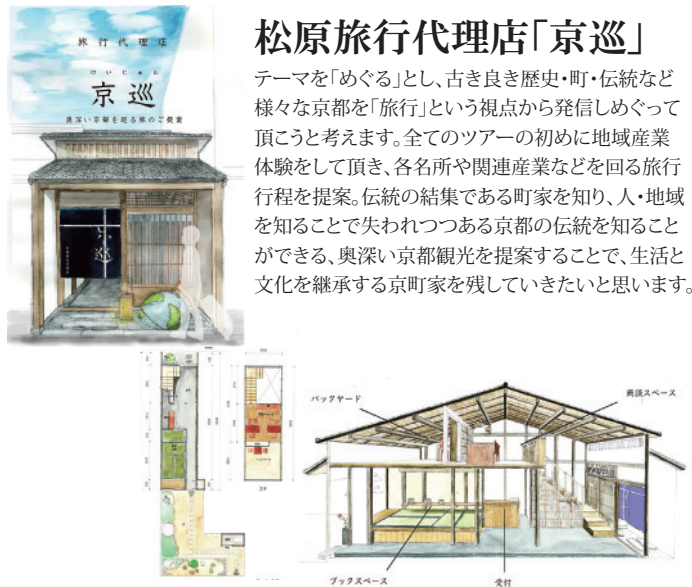
若手職人が、手仕事を通して地域の方と交流し、活性化につながることを願い、課題に取り組みました。



Dグループ／程龍 篠加奈子 石原優輝 向井えりか(京都校)

松原旅行代理店「京巡」

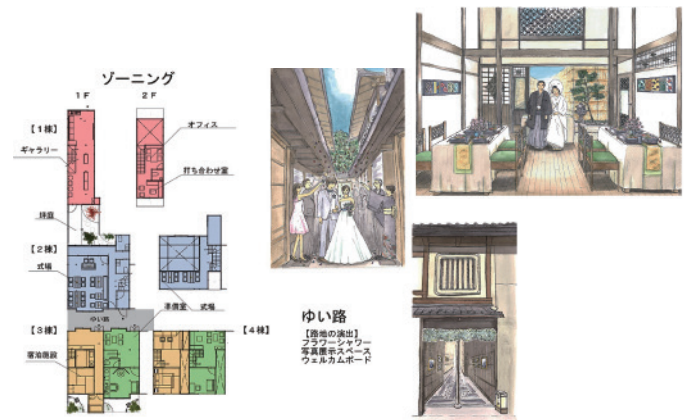
テーマを「めぐる」とし、古き良き歴史・町・伝統など様々な京都を「旅行」という視点から発信しめぐって頂こうと考えます。全てのツアーの初めに地域産業体験をして頂き、各名所や関連産業などを回る旅行行程を提案。伝統の結集である町家を知り、人・地域を知ること失われつつある京都の伝統を知ることができる、奥深い京都観光を提案することで、生活と文化を継承する京町家を残していきたいと思ひます。



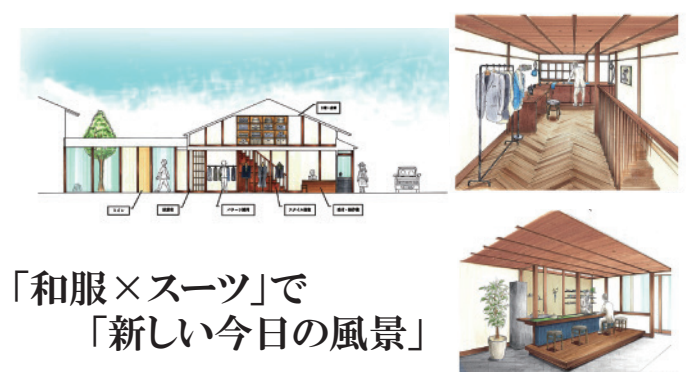
Eグループ／天津一貴 齋藤里奈 中島明日香 村田優人(東京校)

ウェディング会場 ゆいえん

地域のつながりを大切にする町家で、人と人、家と家をつなげる、ウェディング会場ゆいえんを提案いたします。この場所ならではの少人数でアットホームな結婚式をあげることで、町家＝思い出の地となるような場所を考えました。



Fグループ／小澤雅都 斉藤里穂 竹田菜摘 林田大志 望月星斗(東京校)



今回、京町家の保存と再生にあたり、伝統的な和服と近代的なスーツを織り交ぜたスーツスタイルを京町家で提案することで、「新しい今日の風景をつくりたい」と思い、IDÉAを提案しました。

「出逢い」をテーマに「伝統と継承」「人と人」「内と外」「立と座」と4つの出逢いを空間のデザインに設定し、新しい出逢いをIDÉAでという願いをこめ、デザインしました。

Gグループ／金井花音 篠塚瞭 田中千草 藤田紀(東京校)

人々の、様々な関係をとirmつ空間

京都のソトの人々に京都・町家を深く知ってもらうために、関連書籍を中心に置いたライブラリー併設のコーヒースタンドと、京都・町家をもっと堪能したいと考える人々に向けた体験宿泊可能なモデルハウス、その人々にさらに現実的な京都移住をアプローチできるような不動産オフィスを計画しました。



ご協力いただきました皆さまに心より御礼申し上げます。

スペースデザインカレッジ

改修事例◎ 祇園祭町会所の再生－四条町大船鉾会所

中京区

設計：末川協建築設計事務所 / 施工：辻工務店

2015年の4月、四条町大船鉾保存会の理事長から、町内での町家の取得についての相談があった。長らく呉服業が営まれてきた昭和初期築造の商家である。前年に大船鉾の復興は無事果たしたが、ご町内は明治の初めに番組小学校建設のために売却して以降、会所を持たず、持ち回りで居祭りを続けてこられた。今回空き家になっていた商家の所有者は、町家のままで残すことを前提に、ご町内にならば路線価で町家と土地を譲るという申し出をされた。前年の宵山では、多くの人たちに鉾の参拝に来て頂けたが、仮設の昇降台設置のため新町通は一方通行となり、下京警察から改善を求められていた。鉾の船体と屋形、埒や駒形提灯の部材をそれぞれの収納場所から搬出入するのにも延べ4日の作業が必要である。新しい会所から鉾の参拝が出来、鉾の部材を町内に収納が出来る千載一遇の機会である。保存会では商家の取得を決定された。

続く課題は資金のこと。地元の金融機関に保存会が購入資金の借入れの相談を掛けたが芳しくない。保存会での会合の最中に、お料理光安や Ay 邸でお世話になった京都信用金庫の若手の融資担当者に電話を掛けた。すぐに必要書類を教えてくれ、本店での保存会との打合せをセットしてくれた。担当部長が、金利と返済期間の条件をその場で聞いてくれた。その足で京町家再生研究会の理事長を訪ねた。会所への改修資金の援助先の相談である。ワールドモニュメント財団(WMF)への打診を快諾頂けた。5月にはお祭と建物の公益性を根拠に、京都市の景観政策課に計画を伝え、会所としての外観の変更を前提としつつ建物の単体指定と改修助成の検討を依頼した。

6月に商家の所有者にお会いし建物を見せて頂いた。離れを含む屋根のほとんどにトタンが貼られていたが雨漏りの跡もなく、内装もほとんど合板が貼られていたが町家の本来の構造はすこぶる健全であった。融資決定に先立ち、京信の担当者から連絡があり、建物のテナント利用を想定した図面と見積もりが必要とのこと、1,2階別々のテナントが入る最低限の計画を突貫で作成した。晴れてその年の後祭までに保存会が町家の取得を果たし、六本木ヒルズでの鉾建ての直後、これまた突貫でオクの離れの内装の撤去とトオリニワの通路幅の確保の工事、船体部材の収納場所がぎりぎり本番に間に合い、会所としての第一歩を踏み出した。

お祭明けには京町家再生研究会、京都市景観・まちづくりセンターの主導で WMF との調整が始まった。今度はフルスペックの改修計画と見積もりを作成し、10月にはドナーの候補であるフリーマン氏が建物と保存会の取組みの視察に訪れた。そして2016年を迎え、1月、京都市でも町会所の景観重要建造物の指定と平成28年度の改修助成の枠取りが図られ、2月には WMF の助成が正式に公表された。そして実際の改修計画への検討会も始まった。お祭の会所を象徴する銅板大和葺のオモテ庇や2階の真竹の肘掛の新設と合わせ、戦後に落ち間にされた町家の1階オモテの2室はそのままに、昭和初期型の腰の石貼は撤去して祭時にフルオープン出来る

平格子を新設することが決まった。ファサードのデザインの参考にする六角町の町家も作事組理事長から教示があった。次年度の助成予算確保のための外装改修設計を3月中に終え、4月から内装や設備の実設計。設計に伴う調査解体ではササラや胴差のほとんどが再利用材であることが分かった。同時にその年の後祭より建物から鉾に参拝出来るよう、仮設の階段設置のための壁の開口や、仮設の便所、これからも長く使うことになる橋掛の製作の工事など、会所としての第二歩目の工事が完了。お祭の最中に京都市景観・まちづくりセンターの担当者から連絡があり、会所利用なら京都市の空き家活用の助成が使える可能性がある。鉾の巡行が終わるまではとても書類の準備が出来ず、工事の着工が8月後半にずれ込んだ。しかし、景観助成とは別に貴重な助成が決まり、まちセンにはリクシルより会所の衛生器具提供を取り付けてもらい工事予算を補って頂けた。

先述のように町家の構造は健全で、大工工事の見せ所はオモテの軒の出桁、腕木、天秤梁の新設とそれに伴うヒトミ梁の架け直し、それに連なるオモテ3室の大和天井の新設、祭事にお飾りの場となる2階4室の造作、鉾の屋形部材を仕舞うオクの離れの収納床の軸組など。ご神体を飾る床の間や、3層の欄間の復旧には、取り壊される銀閣寺畔の数寄屋から保存会が提供を受けた造作を再利用した。欄間には船型の鉾のシンボル、青海波4つの組合せ文様の透かし彫り。囃子方が鐘を吊るため、2階オモテには天井を補強し金物を取付。新設の水廻り棟の木舞掻きと荒壁付け、オモテの格子や格子戸のベンガラ塗りではワークショップを行い、ご町内や囃子方、まちセンのスタッフ、第5期の棟梁塾生に参加して頂いた。今年の4月に無事竣工、会所のお披露目では、前栽に榊の木が植えられ、これからの神事に使われる。

作事組では船鉾、八幡山に続く3軒目の祇園祭の会所、釜座町町家を含めると4軒目の町家(ちょういえ)の工事であり、初めての再生となる。2014年の鉾の復興をお手伝いしたご縁につながり、多くの方々の力添えのおかげで、鉾の作事方も設計も日々の本業で、ご町内の町家改修に携わることができた。ご町内の神事とともにこの会所が未来永劫ながらえますよう。

<末川 協(京町家作事組 設計担当理事)>



町家再生再訪 その6 ● 「胡乱座」 (担当：アラキ工務店、NOM建築設計室) 第3話

2005年に創業した京町家の宿・胡乱座。以来町家に住み、沢山の人を迎え入れてきたあるじの大橋さんに町家の魅力について語っていただきました。前号・前々号を未読の方はそちらもあわせてご覧ください。

● 町家の魅力について

まず、100年も200年も前からそこに存在するという事実自体が大きな魅力だと思う。私たちは“そこ”で、先人の知恵や創意、工夫に触れることができ、生活の中で生まれた文化や習慣を学んだり感じることができる。また風土に合わせた建築様式が、自然と生活を調和させている。建材が天然素材なので、古くなり解体しても、使えるものは他の町家の補修や次に建てる町家に使うことができる。天然素材ということは土に還すことができるということでもある。すべてがリサイクル可能な家であるということも魅力のひとつである。

空気感、色、匂い、暮らし、素材など感じる魅力は人それぞれだが、町家が好きな人たちは「落ち着く」「癒される」など、町家の醸し出す雰囲気や魅力を魅力にあげることが多いかもしれない。しかし私にとっては、町家に住むことによって学んだり、羨けられたりという生活に、より魅力を感じている。

家やマンションを建てる時に、現代人は快適さを追求し、様々な方法を駆使して、環境(建物)を人間に合わせる努力を惜しまないように思う。技術が進み、その方法は大きく変化してきた。人々の快適さの追求は留まることを知らないようだ。しかし、環境を人間に合わせるのではなく、人間が環境に合わせる努力をする、少しストイックではあるが、私にはそれが楽しい。暑い時は暑いなりに、寒い時は寒いなりに人間が自然に適応するように工夫して生活する、便利さだけを求めるのではなく、当たり前なことを当たり前と感じ、不便さを感じながら生活することも町家の魅力だと私は思う。

昨今、町家や古民家の再生・活用が全国的に展開されているが、何に魅力を感じ、何を残したいのか、なぜ活用しようとするのかと私は敢えて尋ねたい。昔の主流が新しいものにとって代われ、希少になったために、逆に目新しく感じられ、収益が上がるものとしての活用が流行になったように私には見えるからである。失われつつある生活文化や習慣、知恵、工夫を顧みようとしているのであれば素敵なことだが、利益を得るためだけの町家の活用は“再生”と呼べるのだろうか。つまり、時代が変わり流行が去った時に、利益を生まない町家はこれまでと同じ運命をたどるのではないかと私は案じている。

元々の姿の町家に戻す改修は少ないように見受けられるが、町家を改修して住もうとしている人たちは、どのように改修したいと思っているのだろうか。土間は駐車場に、通り庭はな

くす、畳がフローリングに、さらには床暖房、そして当たり前のようにエアコン、サッシ窓など、高断熱で高气密を目指す改修。今建てられている家やマンションとそう違いはないと私は思ってしまう。看板建築から町家らしい昔の外観に戻す改修も、その昔、町家の外観を古臭いと感じてオシャレに作り変えたのが看板建築だという話を聞くと、今の外観改修は“新看板建築”だと、へそ曲がりな私は言いたくなってしまった。

しかしながら、これは仕方のないことかもしれない。町家や古民家は80年～200年以上前に建てられている。当時の気候や文化、文明、人々の思考や生活様式に合わせて建てられたのであり、現在の気候や文化、文明、人々の思考や生活様式には合わないだろう。したがって現代に生きる人に合わせて作り変えられるのは当然の成り行きであり、建てられた当時の姿には戻らない。そして、住み方が変われば生み出される文化や習慣、思考、知恵や創意工夫も変わる。そういう意味では過去の姿のままの町家は生き残れないのが現状であり、過去に囚われすぎでは町家や古民家に未来はない。現在とは“形を変えた過去”であり、未来とは“形を変えた現在”なのだ。つまり過去を踏まえつつ変化していかなければ未来にはつながらないのである。守るべきものは守り、残すべきものは残す、それが伝統と言われるものになると私は思う。

胡乱座に滞在される日本人のお客さままでさえ、古い家屋の構造上の特徴(防音効果がない、床が薄いなど)を理解した過ごし方や心配り、畳、壁、引き戸の扱い、歩き方ができる人は少ない。それは古い建物で暮らした経験がなく、学ぶ機会もなかったからであろう。そんな古い建物での暮らしを体験し、学んだり、感じたり、考えたりできる空間として胡乱座が存在すればいいと思う。なくなりつつある過去の文化や習慣、工夫や知恵を多くの人を知ること、はじめて伝統を未来につなぐことができるのではないだろうか。

繰り返しになるが、町家の魅力は、ただ単に「やべー」「かっけー」「かわいい」などの見た目や、「懐かしい」「ほっこりする」「癒される～」などの雰囲気だけではなく、そこに刻まれてきた文化や習慣、知恵や工夫を肌で感じられる空間が、誰の手にも届くところに存在すること自体なのである。

(文：胡乱座あるじA 大橋英文)

畳の上を摺り足で歩くとき、背筋が伸び、足元に意識が向かうと同時に浮揚感につつまれる。町家の空間と調和していることで得られる感覚。指先に意識を向けることで、長いあいだ和服を着るのが日常であった日本人の洗練された所作が自然に顕れてくる。

(取材：京町家作事組事務局 森珠恵)

聞き手：京町家情報センター事務局 城幸央

● この町家に住むことになったいきさつ

町家暮らしをはじめて10年近くになりますが、現在暮らしている町家との出会いは、一緒に音楽活動をしているギターリストの方に、主人の仕事を探していると相談したところ、ご自身が管理されている平屋建ての物件を紹介してくださいました。そこを主人の仕事場として借りることになり、その近くで住まいにできる町家はないかと探したところ、現在の町家に出会いました。

● 町家をどのように活用されていますか？

町家を「芽吹/MEFUKU」と名付け、1Fは音楽事務所と主人のデザイン事務所、2Fは住まいとして活用しています。また現在、平屋建ての方は音楽スタジオとして活用しています。コンサート、カフェ、ギャラリー、古道具、ワークショップなど、私たちらしく発信できる場所に育ててゆきたいと思っています。

● 改修についてお聞かせください

住む前に自分たちで改修したのですが、暮らしてみても不便を感じた部分を改善するためと、趣味嗜好が変わったこともあり、昨年、2回目の改修工事を行いました。東京恵比寿のアンティークスタミゼのオーナー吉田昌太郎さんにスペースデザインを手がけていただきました。吉田さんはアンティークショップを営まれる傍、スペースデザインも手がけられています。日本の文化を尊重した上で、建物のもつ本来の力をいかしながら、現代のニーズに合わせた無国籍な世界を創り上げられます。アイデアを出し合い、取手のディテールなど、細部にまでこだわり完成しました。とはいえ、賃貸なので改修費をなるべく抑え、材料など工夫し、理想と折り合いをつけながらの改修となりました。

● 住んでみてどうですか？

天井を白く塗装するのは勇気がいりましたが、もともとどこかヨーロッパの雰囲気がある漂う町家だったので違和感なく馴染み、開放感のある明るいスペースに生まれ変わりました。吉田さんが選んでくださったヨーロッパアンティークの照明やテーブルも空間にぴったりで気に入っています。

思い切って2Fの天井を抜いたのですが、心配した断熱も裏板を貼ることで改修前より機密性が高くなったように思います。床の傾斜もなくなり快適になりました。ゆらゆら硝子のショーウィンドウから2匹のねこが通りを眺め、実家の近くの山から拝借した花や枝を主人がいけ、私は箏を弾いたり曲を作ったり・・・

新しい町家の空間で穏やかな毎日を過ごしています。

● 町内とおつきあいはいかがでしょう？

大家さんも改修したことをとても喜んでくださっています。1年にも及ぶ改修だったので、ご近所の方から一町目のサグラダファミリアと呼ばれていたそうです。(笑) 3月の町家ウィークの時に、完成のお披露目として町家写真展を開催したところ、町内の方々をはじめ、たくさんの方にお越しいただきました。改修前よりも、ご近所の方が立ち寄ってくださるようになり、子供たちが猫を見たいと

あそびにきてくれます。改修したことで地域に根ざす覚悟が生まれ、ご近所の方々との出会いを大切に暮らしていきたいと思っています。

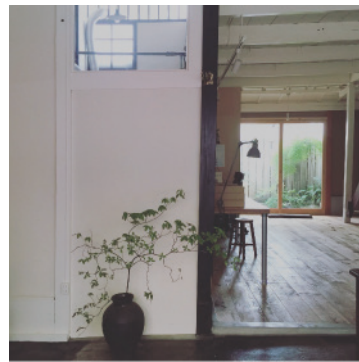
● 町家のうたを作られたとか？

3/8 (March8) 町家の日が制定されたことをきっかけに、作りかけのまま眠っていた「町家のうた」を完成させることができました。町家に暮らして感じたこと、京都ならではの風情、町家保存へ思いを歌詞に込めました。季節ごとに開催している町家コンサート「町家箱」で歌い続けていきたいと思っていますので、ぜひ足を運んでいただけたら嬉しいです。

<http://maiko-net.com>

芽吹/MEFUKU

真依子に関するお問い合わせ、出演依頼、グラフィックデザイン、WEBデザイン、イベント制作、映像制作など、音楽やデザインに関することならお気軽にお問い合わせください。
TEL：075-205-2420
MAIL：utaca@maiko-net.com



●事務局覚え書き

京都市で平成20・21年度に行われた京町家まちづくり調査の追跡調査が実施された。その結果として、京都市中心部調査エリアの京町家ではあるが、47,735軒あった京町家の中で、この7年間で5,602軒の京町家が消失したことが報告された。いまだに、年間約2%の割合で消失が進行し、京町家の空き家率も14%を超えているという。京町家情報センターで活動していて、不動産業界に京町家熱が上がってきていること・京町家を求める方が増えていることは感じていたが、この結果を見るにまだまだ多くの京町家が消えていつている。やはり、京町家としての活用で探している方に情報が回っていない、持ち主にも京町家としての認識がなく、ただの古家として扱われ取り壊されることが多いのではないだろうか。京町家として活用したい方はたくさんおられます。他の利用より先に京町家として活用する方へ繋ぐしつかりとした仕組みをいち早く作るべきだと思います。

< 京町家情報センター事務局 城幸央 >

オーナー登録数：延225

ユーザー登録数：延1644

物件登録数：延1667

成約件数：延211

(2017年6月1日現在)